

チンギス・カンの前半生 その 1
—テムジン誕生す—
Temuejin is born

2018年8月15日 安田公男

Aug 15th, 2018 Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

はじめに

1206年、モンゴル部族のカンであったテムジンは遊牧部族を統合してチンギス・カンの称号を奉られた。44歳の時の事と見なされている。しかし、彼の行動がはっきりし出すのは、その10年ほど前から過ぎない。部族の名門に生まれはしたが幼い頃に父親を亡くしていたので、若い頃はたくさん苦勞があったであろうが史書の記述は少ない。元朝秘史には年次こそ書かれていないものの青年期に至るまでの記述が比較的多いので、想像を交えながら考えてみたいと思う。その初めは彼の誕生である。

1. テムジンの誕生

——父親のイエスゲイはタタル部族相手の戦いに出て、敵の武将であるテムジン・ウゲとコリ・ブカを捕えるという手柄を立てて家に帰って来た。ちょうどその時に妻ホエルンが男の子を生んだのでテムジンと名付けた。——

父親の戦果の大小にかかわらず、自分が打ち負かした敵将の名を我が子に付けるのは日本人の感覚ではありえない。不思議に思うが、子の名と年令から出来事の起きた年を正確に長期間憶えておける利点がある。いわば歴史記録を目的とした命名方であり、無文字社会にはままたのこと(1)。この場合もそうだと思う。誕生地については、ヘンティ県のダダル 49.02N111.62E となっており、大きな石の記念碑も建てられている。以前はその西 100km ほどにあるビンデル 48.58N110.62E が候補であった(2)。二つの集落が候補地とされていたのには理由があると思うので、後で考察する。モンゴル国では、誕生日が 1162 年の冬の最初の月の元日と、6 年前に決められた(3)。1162 年は元史によるものであり、確定している訳ではないが一般的に採用されている。月日は陰暦なので陽暦に直せば変動するが大体 11 月頃であり、2018 年は 11 月 8 日が誕生記念日である。ただ、月日は集史にイスラム暦 547 年の 11 月生れとあるだけである。冬の最初の月というのもそれに基

づいているのかも知れないが、論拠を示した資料が入手できない。

一つ疑問に思うのは、イエスゲイが戦いを終えて帰って来たのなら、冬の初めは少し早すぎはしないかということである。というのは、遊牧民の戦いは家畜が成長して冬の食料を確保し、馬も肥えた冬の初め頃から始まる事が多いからである。首都のウランバートルを例にとれば、10月半ばから最高気温も氷点下を下回りはじめ、11月になると進路を遮る河や湿地が完全に凍りついて移動しやすくなる。その頃に出陣したとして、戦いが2カ月ほどの短期間で終われば現在の年末年始頃の帰還となり、もう少し長引けば2月頃となるだろう。その時期は家畜の出産ラッシュとなり忙しくなるので、ずれこまないように帰って来るのではなかろうか。そうすると、現在の年末から2月までが誕生月の候補になる。一般論としてはこのようになるが、後述するように、この戦いは前年にタタル部族にカンを殺害されていたモンゴル部族の初めての本格的な復讐戦だったと考えられる。すると、部族は冬まで待つのを我慢しきれず、秋になると騎馬隊だけで出陣して急襲し、冬になるまでに引き上げたとも考えることができる。そうであれば冬の初めであっても良いのだろう。

2. ホエルン強奪事件

——その頃、イエスゲイはオノン河のほとりで鷹狩りをしていた。メルキト部族のイエケ・チレドゥと言う者がオルクヌウトの民のところから娘を娶って帰国しようとしていたのに出会った。イエスゲイは娘が容色にも優れた良い女だと見て奪い取る気になり、兄のネクン、弟のダリダイ3人で追いかけた。それを見たホエルンはチレドゥを振り返り、「どの三人の顔つきも良くありません。連中はあなたの命を狙っています。命さえあれば又良い娘を娶る事が出来ます。私の香りを嗅ぎつつ逃げて下さい」と言いながら、着ていた下着を形見に渡した。チレドゥは駿馬に乗ってオノン河を遡って逃げて行った。悲しみに泣き叫ぶホエルンを乗せた牛車を牽いて3人は家に帰った。——

イエスゲイは人妻を奪い取って自分の妻としたという秘史の中でも有名な一節である。ホエルンはコンギラト部族のオルクヌウト氏族長の娘であり、チレドゥはメルキト部族長トクトアの弟であった。イエスゲイはモンゴル部族の初代のカンであったカブルの孫である。登場人物のいずれもが部族の指導者層に属していた。モンゴルはコンギラトとは代々の通婚関係があったが、メルキトとは激しく敵対していた。メルキトとコンギラトがどうであったのか不明であるが、実距離で1,500kmほども離れていて、そのあいだにはモンゴルとケレイトという部族の壁と、ヘンティ山脈とその北に広がる山岳部、現在のブルカルスキー州立自然保護区という自然の障壁があった。遊牧民がいくら長距離移動を苦にしないと言っても往来は容易でない。従って、良くもないが対立もしていない、中立的な関係だったのではないだろうか。当然通婚は稀だっただろう。そのような状況での結婚だから、部族上層部で決めた極めて政策的なものであったと考えられる。

3. モンゴルの結婚

遊牧社会で結婚が多く行われる季節は農耕民族と同じく秋であった。9月の末から10月に入って直ぐであろうか。結婚は親が決め、かなり遠方同士が顔も合わせずに式の当日に一緒になるのが普

通であったと言う。血が濃くなるのを防ぐためとの説明を、モンゴル人自身から聞いたことがある。広大な土地に人が分散して住んでいる弊害を防ぐ風習であろう。結婚適齢期と見なされるのは、牧民としての日常作業が一通り出来るようになる頃、男が 17,18 歳、女が 15 歳過ぎ頃からである。この辺り昔の日本とあまり変わらない。登場人物の年令を推測する術はないが、全員 18 歳前後と考える。当時は、テムジンとボルテの例のように、嫁の年令が少し高いのが普通であったようである (4)。婿が嫁の里に行つて式が行われ、新婦と共に夫の里に帰るのが通常であったが、その前に更に風習があった。部族長や氏族長の子弟ならば、双方の幼少期に親が相手を決めてしまうことが多く、しかも、男の子が嫁となる女の子の里に預けられてしばらく過ごすのが一般的だったらしい (5)。そうするとホエルンも幼少期に婚約者であったチレドゥと共に暮らしたことがあったのだろうか。そうであると、子どものチレドゥを千数百 km も連れて行ってしばらく置き、また連れて帰ることになる。生活に必要な家族ぐるみの移動ならともかく、余りにも手間暇がかかる。このような風習が、遠隔地のメルキト部族との間で保たれていたとは思えない。部族間の交流を深めたいとの機運が両方の部族にわき上がった時に、たまたま適齢期の二人がいたので結婚となったのであろう。ホエルンには別に婚約者がいたのだが相手を亡くしてしまっていて、自由の身であったのかも知れない。チレドゥの場合は既に妻帯していたとしても不思議でない。第一夫人として迎えることができれば、ホエルンの父も文句を言わなかつたらう。

4. 部族間の交流と通行の自由

遠距離結婚は部族間の関係を強めようとする表れであるが時間と費用がかかる。両方の親の社会的地位が高くないとできないから、権威を誇示する意味もあるだろう。部族双方に歓迎する雰囲気が必要だが、この場合はメルキトの方の気持ちが強かつたように思う。この部族は北方のバイカル湖付近に奥まわつていて南の豊かな地域から遠い。西方のナイマンやオイラトとは友好的であつたようであるから、中央アジア方面の物産は比較的入手しやすかつただろうが、東と南に隣接するモンゴル、ケレイト両部族とは仲が悪かつたので、漢土の物が入手しにくかつたと思われる。自国では黒貂などの優秀な毛皮が多く取れるので、それと引き換えたくとも思うようにならなかつたのではなからうか。その為、金国に近いタタルやコンギラトとの関係を強くしたいと思つたのだろう。彼等が得た物資を得るために、メルキトは敵であるモンゴルを飛び越えて、コンギラトやタタルとの関係を強めることを図つた。当時、中央アジア諸国からサルタク人という商人が直接草原に入り込んで毛皮の買い付けに来ていたことも秘史に書かれていたが、彼らが商取引の全てを担つていたとは思えない。部族間の取引が多かつたはずだ。

以上のような背景の下に結婚が企図されたのだろう。ただ、交渉のために当事者以外が何度か行き来したはずだ。先ずメルキト人の使者がコンギラトに行つて結婚の相談をして、ふさわしい乙女がいることを確認する。次にコンギラトの使者がメルキトに行つて婿を実見して話が真実である事を確かめる。帰国してホエルンの親に報告する。チレドゥがやつて来て結婚式が行われる。新郎新婦がメルキトに帰る。最低これだけの往来が必要である。後で明らかにするように、1500km にもなるかとする旅だからモンゴル部族領を通過するのが一番近い道だったのだろう。広大な草原

社会であっても自然の障害と牛や馬に与える水や草の関係で通れる道筋は制限されるのである。その都度モンゴル部族民に出合っていたら問題が起きなかった。だから、チレドゥも来たのと同じ道を夫婦一緒に帰るのに不安はなかっただろう。ただ、旅支度が非常に簡素なものだったことに注意が必要である。遅い牛車に乗っており、早く通りすぎたいような気持ちが全く窺えない。逃げるのにも馬が一頭しかおらず二人で逃げられなかった。両方の親は身分のある者だから、旅支度を豪華にしようと思えばできたはずであるが、最小限のものだった。大がかりな通行をしないことが安全な通行の担保だったように見える。それが、部族間の対立に関係なく自由に通行ができる基準であったのだろう。後年、イエスゲイが単独で敵のタタルの酒宴に立ち寄ったり、テムジンと敵対したジャムカがテムジンやオン・カンの領土を飛び越えてナイマンやメルキトと同盟を結んだりもしている。既に諸本に述べられているように、条件を満たせば通行が自由であるような掟が草原世界に存在していたのであろう。それを守って通行していた二人を襲ったのだから、イエスゲイが行った事は犯罪であった。モンゴルとメルキトの関係は更に悪化するし、コンギラトとの関係も悪くなる。部族の大人たちからも非難される筋合いのものであった。しかし、イエスゲイはただの暴漢であったのだろうか。ホエルンが良い女だったということを超えた何かの理由があったように思える。その前に旅程や事件のあった場所を考察する。

5 旅の経路

5.1 オノン河北方の経路

二人の旅の行程を考える時に分かりにくいのが、オノン河からどのような経路でメルキト部族まで帰ろうとしていたのかということである。メルキトの中心地はキャフタ近郊なので、グーグルマップ（以下 GMap）でその辺りを見るが、北方に山地が広がり道路表示がない。だが、図1（6）にはオノン河から北に伸びる道筋が2つ描かれていた。

図1 オノン河北方の交通路



GMap を拡大して細かく見て行くと、49.19N109.77E 地点からオノン河を離れて、アシंगा河という支流を遡っていく経路表示があった。これが①であろう。49.53N109.90E 付近でアシंगा河は終わり、チコイ河の源流に向かう。そこは分水嶺とも言えない平坦に見える土地で両河の源流が隣り合い、経路表示が続いている。チコイ河は北に流れてから西に大きく向きを変えて南西のキャフタ方面に流れて行く。ところが河に沿った表示は b 区間でつながっていない。GMap では一応表示があるのだが、兩岸に山が迫り通行しにくそうである。

もう一つの道②はキャフタまでつながっていて経路は次のように考えられる。オノン河本流を遡って進み、図 1 のように現在の国境線沿いに西に進む。ロシア側には経路表示があるが、途切れた個所がある。国境を縫うように走っている経路と思われるが、モンゴル側の表示がなされていないようである。道が続いているとしてそのまま西に進むと、49.35N109.18E 付近から道路表示が始まりロシア側のメンザという村に向かっている。この村の中をヘンティ山脈に源を発するメンザ河が北流しており、西に向きを変えてチコイ河に合流する。ずっとメンザ河に沿った経路にも一応表示があるが、川の蛇行が激しい上に兩岸に平地が少なく通行しにくそうである。メンザ河の途中の 50.03N109.38E でロモヴァヤ河沿いに北東に進み、50.14N109.21E の三差路を北西に進むと 50.27 N109.09E でユガル河に出、河に沿って更に北西に進むとチコイ河に合流する。後は河なりに進めばキャフタに達する。メンザ河からの別れ道は他にいくつかあるので確信はできないが、②の道であると判断する。

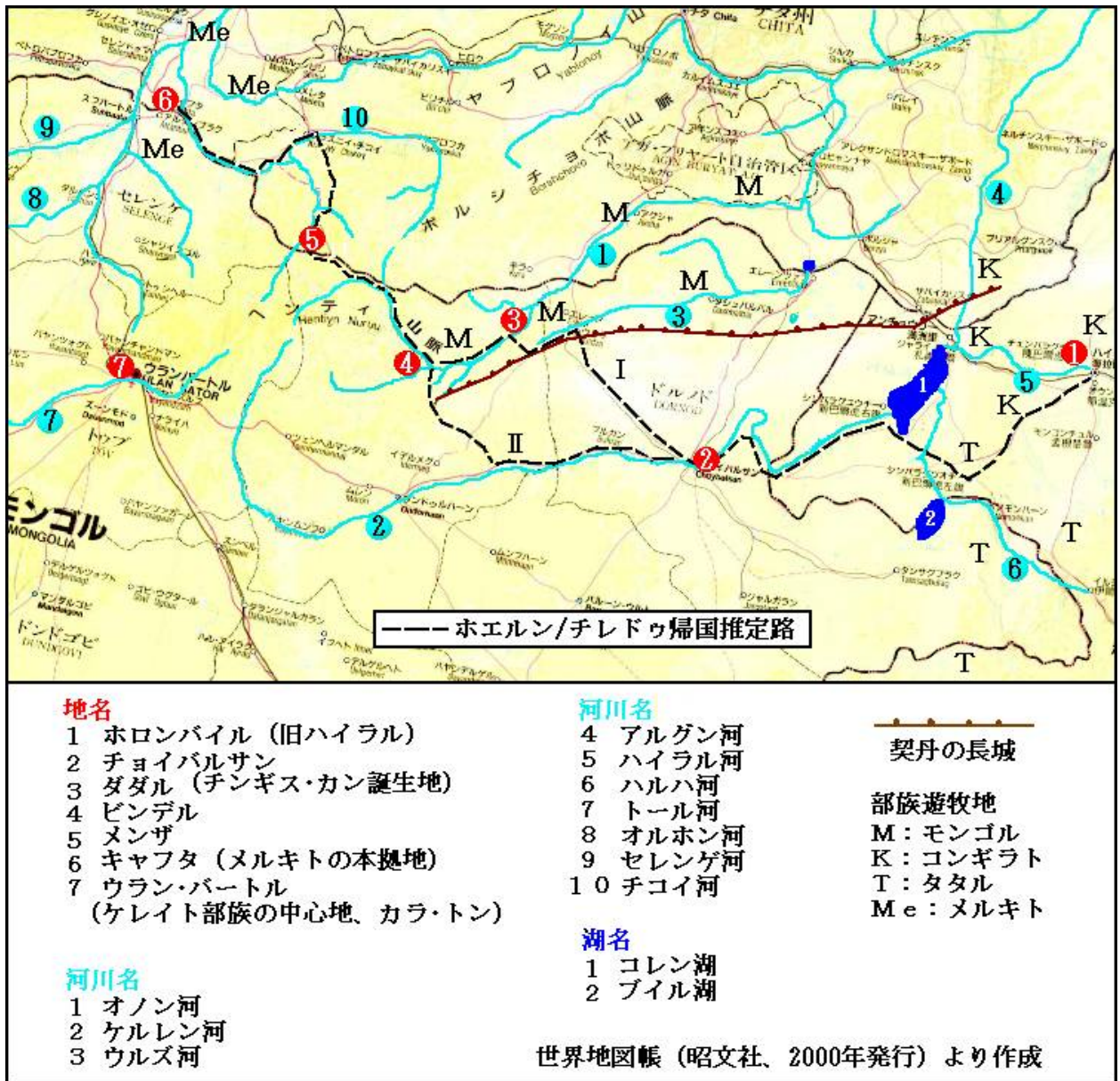
③は図 2 の昭文社の地図にある道である。メンザ河沿いの 49.99N108.96E 地点で河を離れて西に進み、キルキロト河、ポリシャヤ河を経てチコイ河に合流する経路かと思う。

②がモンゴルの地図に明瞭に出ているので、これがメルキトとモンゴルをむすぶ当時の交通路であったと考える。この地帯の山は 2,000m 級のものであるがモンゴル高原の平均標高約 1,000m からするとそれほど高くはない。だが山が連なり分岐する河の流れや別れ道は無数にある。まるで迷路のようであるから、よほど地理に詳しくないと通行が難しそうである。しかも、現在でも集落がほとんどない。平地が少ない上に植生が薄くて農業にも牧畜にも向いていないのだろう。多数の牛車や馬が通れるような所ではないと思われる。当時ウリャンハイと呼ばれる部族が山岳部にいて狩猟漁労を営んでいたことが知られるが、恐らくこの土地にも分散的に住んでいて、道案内もしていたのではなかろうか。道は一応決まったが、この辺りの山地をどのように呼ぶのか資料ごとに名が違っていて困惑する。GMap ではブルカルスキー州立自然保護区であるから正式な名前なのだろう。図 1 や図 2 ではボルシュチョボ山脈とあり、英文関係ではヤブロンブイ山脈と呼ぶようだ。

5.2 ホエルンとチレドゥの帰国経路

ホエルンの属するコンギラト部族は今のコレン湖の東、ホロンバイル地方を遊牧していたので、現在の中国のホロンバイル市（旧ハイラル市）でチレドゥとホエルンの結婚式が行われたとする。式を終えた後南西に進み、現在の新巴尔虎左旗を経てケルレン河口付近に向かう。河の南岸に沿って進み、河を渡ってチョイバルサンに行く。この経路は、研究ノート「長春真人の旅」での検討結果から推定した（8）。

図2 ホエルンとチレドゥの旅の推定経路



そこから2つの経路が考えられる。Iは現在の道路に従って考えた経路である。遮るもののない一望の平原を進み、ウルズ河を経てからダダルの南付近でオノン河に達する。IIは、チョイバルサンから更にケルレン河沿いに西に進み、現在のバヤン・オボーから河を離れて北西に進路を変え、契丹長城の西の端をかすめてからオノン河に向かう経路である。

Iの道にはウルズ河に並行するように長城が東西に長々と横たわっていて、西はビンデルの南あたりまで伸びていた(9)。契丹がモンゴル部族の侵攻を防ぐために作ったものである。見ての通り、オノン河の中下流域にあたる現在のロシア領アガ・ブリヤート自治区辺りからの侵入を食い止めようとする配置である。その辺に当時のモンゴル部族の勢力中心があったのだろう。ただ金国になってから長城の防衛は放棄されていたと思われるので、界壕を越えることに問題はなかっただろう。それを越すとウルズ河に達する。河を70kmほど遡ったノロブリン(Norovlin)で北西に山道を30km

進めばオノン河に達し、ダダルの南 20 数 km の地点に出る。そこから 95km でビンデル 48.58N110.62E である。この集落は現在のオノン集落の南 6km のホルホ河沿いにあったが、30 年ほど前に現在のオノン河沿いの地に移転して名前もオノンに変わった (10)。

II は当時の幹線路とも言うべきケルレン河に沿った行程が長くて旅をし易い。モンゴル部族領内を通過する場合も長城を外れた人の少なそうな地域で、モンゴル領通過距離も短い。図 1 に道路表示があるし、GMap でも通行痕は明瞭に見えるので移動に問題はないと思われる。西北から流れて来るオノン河が北東に向きを変えるあたりで河に達する。現在のドゥールリグ (Duurlig) 48.55N111.08E のすこし西であり、そこから 40km 進めばビンデルである。

現在の幹線道路に従って考えた I の経路は、当時のモンゴル軍主力の一部が南下する通り道であったろうし、モンゴル部族のど真ん中を通る事になる。安全だと思っけていてもチレドゥとホエルンにはあまり通りたくない道だったであろう。従って II の経路であったと判断する。移動距離は次のようになる。

ホロンバイル—540km—チョイバルサン—190km—バヤン・オポー—130km—オノン河 (ドゥールリグ西)—25km—ビンデル—185km—メンザ—160km—メンザ河・キビルチハ 河出合い—60km—ユガル河・チコイ河出合い—140km—キャフタ。 総計 1,430km
--

ホロンバイルからキャフタまで、山道も多いので牛車の速度を平均 26km/d (7) とすれば、総日数 55 日、ほぼ 2 カ月の日数が必要となる。長距離の旅ではあるが、遊牧民にとって特別長いというほどのものではない。

6 事件の起きた場所

以上のように旅の経路を考えると、オノン河に達した地点からほど近いビンデルにイエスゲイの家があり、そこから鷹狩りに出ていてホエルンたちを発見したとするのが考えやすい。鷹狩りと一般に訳されているが、実際に行っていたのは鷲狩りであろう。現代でも大型のイヌ鷲を使い、獲物も狐のような大きいものを狙う狩りである。映像を見ると、馬に乗って大型の鷲を獵場まで連れて行って狩りをしているから、家からそれほど遠くには離れていないようである。従って、100km も離れていたダダルからやって来ていたとは考えにくい。ホエルンを奪った時のイエスゲイはビンデルに住んでいて、そこから数 km 離れたオノン河に鷲狩りに出かけてホエルンたちを見つけたと考えたい。ホロンバイルからビンデルまで実行程は 880km 程度である。平原地帯なので牛車の速度を平均 27km とすれば 33 日間要する。10 月半ばに出発したと推定すれば 11 月の半ば頃に事件が起きたことになる。その頃になると河や湿地帯も十分に結氷して通行しやすくなっているだろう。鷲狩りは、大地が白くなり獲物を見つけやすくなった冬に行われるので、両者が行動している季節は合致する。

7 事件の背景

7.1 モンゴルとタタルの関係

イエスゲイの行動について考える時、2. で引用した文の冒頭にある、「その頃」が重要である。示されているのは秘史の前節で、モンゴルの2代目のカンであったアンバカイがタタルに捕えられ、金国に送られて殺されたとの内容である。秘史では理由として、アンバカイが自分の娘をタタルへ嫁に遣ろうとして自分で送って行き、金国に靡くことを決めていたタタルの謀略に掛かったとする。集史ではアンバカイがタタルの娘を自分の妻にしようと求めに行き、タタルが侮辱されたように感じたからとする。筆者はこの場合秘史が正しいと考える。後で述べるように、この事件はアンバカイの個人的資質がタタルとの不和をもたらしたのではなく、金国との政治情勢を考える時に良く理解できるからである。集史はモンゴル本土から遠く離れた中東で作られたので当時の事情が分からなくなっていて、後世に理由付けを考えたと思われる個所がまま見受けられる(11)。

図2に示した契丹の長城の位置からすると、タタルはいかにも敵陣である契丹側にいてモンゴルに対抗しているように見える。だが、モンゴルがタタルの遊牧地を通過しなければ契丹への脅威とはならなかったはずであるから、タタルはモンゴルの自領通過を黙認していたというよりは、モンゴル部族と共に侵攻作戦を行っていたのに違いない。しかし、タタルは契丹に隣接していたので、界壕建設時には表面上契丹に従わざるを得なかったのだろう。時代が下り、契丹が金国に変わっても事情は同じだった。侵攻して来る部族として、萌古斯すなわちモンゴルと並んで韃靼すなわちタタルの名がよく上がる(12)。二部族は共同して侵攻していたのだ。コンギラトの名はあまり出て来ないが、後に金国に攻撃されていることを考えると当時から同一行動をとっていたと考えてまちがいない。侵攻作戦にあたっては、金国語や漢語を話せる人材と金国内の地理知識が必要だったはずだが、奥地に住むモンゴルにはそのような人材が少なかったはずだ。金国との国境近辺に居るタタルやコンギラトがそれらのことを受け持っていたのではなかろうか。金国に隣接した自分たちが先頭に立つのはまずいので、モンゴルを表向きの盟主とし、裏に居ながら実は作戦をしきっていた可能性が強い。コンギラトはモンゴルと同調していただろう。

7.2 金国の動き

金国は北方にこのような脅威があったが、当時の皇帝は宋国征服を目指し自ら戦地に赴いた。戦いが始まったのは1161年の9月であるから、テムジンが生まれたとされている年の前年となる。豊かな宋国を征服できれば北方の遊牧部族など後でなんとかなると皇帝は考えていたのに違いない。ただ、宋国作戦の間は北方でめんどろを起こしてもらいたくないから、なだめておこうとしただろう。見返りは北方に不足する物資の供与で、窓口はタタルだっただろう。北方部族が納得することを確認する必要があるので、物資の供与は最低でもその前年、1160年くらいから始めたはずだ。その時は三部族で公平に物資の分配がなされたのだろう。メルキトがコンギラトとの関係強化を目論んだのも、このニュースを聞いたからかもしれない。その後金国はタタルを裏切らせて敵の内部対立を起こさせた。費用は掛かったが工作は成功したので、安心して宋国攻撃が出来るはずだった。ところが、この作戦に反対する者が本国で立ち上がり、その意向を受けた部下のために皇帝は陣中

で殺されてしまう。作戦開始 3 か月後の 12 月だった。作戦は中止され、死後の皇帝は海陵郡王の身分に落とされて、更に庶人にまで落とされる。が、文献での引用上は海陵王とされる。

7.3 モンゴル部族の反応

アンバカイがタタルに捕えられた時、オキン・バルカクという人物も同行していて同じ運命をたどっていた。彼は前のカンであったカブルの長男であり、イエスゲイの父のすぐ上の兄であった。部族の最有力者の一人であった彼がいたのを見ても、単なる結婚式への参列とは思えない。合わせて非常に重要なこと、即ち金国からの物資の受け取りがあったのに違いない。結婚式の後、アンバカイらはそれらを携えて意気揚々と凱旋するつもりだったのだろう。戦わずして二年も続けて得ることになった贈り物に、侵攻作戦の盟主であったアンバカイは自分の力だと思い、気持ちが大きくなっていたのにちがいない。草原のルールに反した結婚式の流れをタタルから提案されても疑わず、金国の罠に落ちた。その詳しい内容が草原に伝わって来て部族全体に広がるまでには、事の初めから月単位の時間が掛かっただろう。それを知ると、モンゴル内は直ぐにでも復讐しに行こうとする殺気立った雰囲気になっただろう。実際に行動に移そうとした者もいたかも知れない。イエスゲイのような若者は特にそうだったと思う。だが、戦いはないものと考えていたから準備が直ぐに出来ない。カンたちがいなくなるとは作戦行動もとれない。個別に出かければ帰り討ちにあうかもしれず、欲求不満の溜った状態になっただろう。タタルだけでなく同盟部族の全てが信じられなくなったのではなかろうか。物資分配にコンギラトも同席していただろうから、タタルと示し合わせていたと思われても不思議ではない。詰問するような態度で使者が向けられただろう。

8 イェスゲイはなぜ事件を起こしたか

アンバカイが捕えられてからモンゴル部族が衝撃を受けるまでのしばらくの間、嵐の前の静けさのような平穏な時期があった。まさにその時に、ホエルンたちの結婚式は行われて旅立っただろう。途上で異変を知ったであろうが、コンギラトもメルキトもこの騒動には特に関係がないと信じていただろうから、通常通りに旅が出来るとして進んだだろう。一月ほど進んで、鷹狩りをしていたイエスゲイと出合った。この狩りは獲物を得ることが目的には違いないが、娯楽の要素が大きいのは洋の東西を問わない。だが、彼は決して楽しんでいた訳ではないだろう。少し前に、カンと自分の伯父が金国で殺害されたとの悲報が届いていた。それにより湧きあがった激しい憤りを、少しでも晴らそうとするためのものだったのではないだろうか。そのような気持ちでいる時にホエルンたちを見つけた。平常時ならば見過ごすだろうが、時が時だけに、コンギラトさえもメルキトと手を組んで、自分たちを窮地に追い込もうとしているとイエスゲイは思った。そして、二人の旅を阻止するのが部族のためだと考えた。実行には、弟のダリダイはともかく、少しは道理をわきまえていたはずの兄のネクンまで加勢している。突如生じた部族の危機が、兄弟そろっての暴挙にあるのだろう。三人の顔つきが良くないとホエルンに言わせているのも、自分たちの手で部族を守るのだという思いつめた気持ちが顔に出ていたからではないだろうか。事件後しばらくしてコンギラトへの疑いは晴れただろうが、イエスゲイのやった事は今更元に戻せない。ホエルンは身分が良い女で

あったから、イエスゲイは自分の妻とした。知らされたホエルンの父はしぶしぶ追認したのだろう。だが、部族の興奮が一段落してから考えると、やはりイエスゲイの行為は草原の掟破りでしかなく、よくやったという評価にはならなかっただろう。

モンゴル部族はカンが殺害されても直ぐに動きが取れなかった。恐らく冬が明けて春になったころ新しいカンを選んだ。初代カンの息子で、オキン・バルカクとイエスゲイの父の弟にあたるクトラであった。彼をカンとし、アンバカイの三男であるカダン・タイシと協力してタタルに復讐せよとの遺言を使者が伝えたのである。直ちに復讐戦を挑みたかったであろうが、冬を越して馬は痩せており食料の蓄えも少なくなっている。それでも本格的な戦いの季節である冬まで待っていると敵に侮られるから、規模は小さいが攻撃を行ったかも知れない。夏を越し馬が肥えた秋、本格的な戦いを仕掛けた。戦いを待ちかねていたのと、敵の不意を打つために9月の半ば過ぎに出陣したのではなかろうか。西方居住のモンゴル部族は図2で推定したIの経路の逆方向でチョイバルサンに向かい、オノン河中下流域に居住する東方の氏族はズン＝トレイ湖辺りを経てやはりチョイバルサンに集結しただろう。イエスゲイの一族は、軍団に合流しやすいのと留守中にメルキトから攻撃されないために、部族の中心に近くて守りやすいダダルに移り、ホエルンなどの妊婦に幼児や老人などを置いて出かけたのだろう。イエスゲイは年令から考えて初陣、多くて二度目の戦いだったと思われるが、上層階級であるので何人かの兵を率いていただろう。そして敵の武将を二人も捕えるという大戦果を上げて、亡き伯父の仇を少しは返す事ができた。乱暴者とされていたイエスゲイの評判はこれでいっぺんに上がっただろう。甥の活躍にクトラも喜んだであろう。この後クトラは十数度もタタルと戦うが、恨みを晴らす事はできなかった。イエスゲイはこれらの戦いで将としての力を発揮したと考えられ、志半ばにしてクトラが亡くなった時は部族を代表する武将にまでなっていた。二十歳台半ばだったと思われる。ただ、一度付いた悪い評判はなかなか消えるものではない。陰でずっと付いて回っていたのではないか。敵の陣営も力のある彼の情報を集めていただろうからそのことは知っていたであろう。後にタタルの酒宴に立ち寄った際に毒を盛られたのは、イエスゲイの顔が知られていたばかりではないだろう。「こいつは草原の常識を守らない奴だから、同じ報いを受けて良い」と思われていた可能性がある。自分に向けられた悪評の危険性に気付かなかったのはイエスゲイのぬかりであろう。

9 まとめ

テムジンの出生を1162年11月として事の成り行きを表1にまとめた。史書にある金国の事件の年次は、想像によるイエスゲイの行動とテムジンの出生年月としてみなされている1162年11月をよく補強しているように思える。

イエスゲイがホエルンを奪ったのはビンデルに住んでいた時だった。戦いの時はダダルに移り妊娠中のホエルンを置いて出かけたので、そこでテムジンが生まれた。イエスゲイの生活拠点がダダルとビンデルの2か所にあったので、後世それぞれがチンギス・カン出生説話を持つことになったのではなかろうか。

表 1

年 月		出来事
1160年	夏～秋	金国から三部族に物資供与があり、公平に分配。メルキトはこの噂を聞き、コンギラトとの関係強化のために婚姻を結ぶ事を持ちかける。双方の使者が往復し、チレドゥとホエルンに決まる。
1161年	9月末	アンバカイ・カンは娘の結婚式のためと、今年度の物資受け取りのためにタタルに赴くが、金国に寝返ったタタルのために捕えられる。イエスゲイの叔父クトラをカンに、自分の三男であるカダン・タイシを後継者として復讐するように遺言する。 *金国の海陵王、宋国への攻撃を開始。
	10月初	チレドゥとホエルンがコレン湖の東方で結婚。帰国の旅へ。
	10月中	金国に送られたアンバカイらが殺される。
	10月末	アンバカイらが殺されたとの報がモンゴルに届く。
	11月中	イエスゲイがチレドゥとホエルンの旅を襲い、ホエルンを捕える。
	12月15日	*海陵王、陣中で部下に殺される。
1162年	1月	イエスゲイ、ホエルンの父に了解を求めて妻とする。
	4月	モンゴル部族はカンにクトラを選ぶ。
	9月～10月	モンゴルがタタルに本格的な復讐戦を挑む。
	11月	イエスゲイ手柄を立てて戦陣より帰宅。テムジン誕生。

10 自由な想像

ホエルンについて少し小説的な発想をしてみる。

一つは、ホエルンの幼い頃に、チレドゥ以外の許婚者がいた可能性について述べたが、その相手をモンゴル部族の者だったと考えることである。当然、部族上層部の若者だっただろうから、イエスゲイの親族で、よく知っていた若者だったのかもしれない。そうであれば、一度はモンゴル部族に属することが決まっていたのだから、何としても取り返したいとの気持ちがイエスゲイに湧いたとしても不思議ではない。この事件の後も、コンギラト部族から恨みを買っていなかったようであるので、コンギラト側にも、やむを得ないとの気持ちがあったのかもしれない。

二つ目は、ホエルンが着ていた下着である。これはチャムチャと記されており、アラビア語由来のもので、フランス語シュミーズの語源であるという。中央アジアの商人が、イタリア原産のリネン製（亜麻布製）のものを草原世界に持ち込んでいたとの説もある（13）。であれば、中央アジアとつながりの深かったナイマン部族からメルキトに渡ったものをチレドゥが持参してホエルンの親に渡し、それをホエルンが着ていたとも考えられる。草原世界に不足していた大きなものが布製品で、歴史的には随分長い間中国製の古衣が流通していた。現代でも、訪問者を歓迎する時にハダックという青い布切れを渡すのは貴重品であったことの象徴なのだろう。ホエルンの時代にチャムチ

ヤは特別なものだったから、今まで着た事もないさらりとした肌触りにホエルンは天にも昇る心地がしただろう。チレドゥとの別れ際に渡したのは、愛情を込めて還したのではなかろうか。

1 1 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房，東京
：村上正二(1970)「モンゴル秘史1，2，3」平凡社，東京

『集史』：『史集』(1983)，商務印書館，北京

：ドーソン著，佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社，東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局，北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<研究書ほか>

(1) 梶茂樹(2012)「言語研究」142号1-28頁

(2) 藤井真湖 (2009)「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相」愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告
41-56頁

(3) 在日本モンゴル国大使館ほかネット情報

例：<http://www.kaze-travel.co.jp/mktnews20121113.html>

(4)、(5)村上正二(1985)「モンゴル秘史1」91頁，注

(6)www.vidiani.com/maps/maps_of_asia/maps_of_mongolia/large_detailed_road_map_of_mongolia.jpg。

(7)安田公男(2017)「長春真人の旅」17頁，HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)

(8)安田公男(2017)「長春真人の旅」7-8頁，HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)

(9)白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」22頁，同成社，東京

(10)古谷隆彦、阿子島功(1992)「モンゴル北東部，ビンデル付近の形成中のアースハンモックについて」季刊地理学 Vol.44，pp.101~116

(11)安田公男(2017)「クイテンの戦場はどこか」12頁，HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)

(12)外山軍治(1964)「金朝史研究」421-442頁，同朋社，京都

(13)村上正二(1985)「モンゴル秘史1」74頁

以上